

大学教員生活を 振り返って

別府大学
学長 佐藤 瑠威

大学の目的は教育と研究（近年この二つに加えて社会貢献の三つを挙げることが一般的になったが）と言われる。大学教員の仕事を40年近くやってきたので、教育も当然本務であったわけであるが、自分を教育のプロと言えるかと問われると、自信をもって然りとは言えない気持ちがある。

大学教員の中にも優れた教育者や教育熱心な人は数多くいる。別府大学にももちろんいる。しかし大学教員の多くは、最初は或る学問分野に関心を持ち、その分野の専門家となることを志して研究を始めるのであり、本来研究者として大学での生活を始めるのである。大学教員は明らかに研究のプロ、専門家であるが、必ずしも教育のプロであるわけではない。大学教員を育てる大学院は研究の仕方については教えるが、教育の仕方を教えることはない。学生時代に教職課程を履修していなければ、大学教員は教育については無知なままに教員生活を始めるのである。大学教員で教職を持っていない人は数多くいる。

実は私も教職資格を持っていない。私は法学部の政治学科に進学したが、周りに教職課程を履修して教員になろうとする人は全くいなかった。大学院に進学して大学教員になりたいと考えていた人たちも教職資格は取っていなかった。私も含めて当時（今も変わっていないかもしれないが）大学で教えるためには研究者としての力を身に付け、研究業績をあげることが第一（あるいはすべて）であると考えている人が多かった。もちろん、大学教員になれば研究だけでなく、教育も重要な仕事、最も重要な仕事となるのであるが。

それでも、私も含めて多くの大学教員が教育を最優先事とみなして、教育の専門家となるための努力をあまりしてこなかったように思われる。その理由は、大学教育の目的は何よりも高度の学問研究の成果を講義等の場で学生に伝えることにある、というような大学教育観のもとで多くの教員が育ってきたからであろう。このような大学教育観においては、学問研究に打ち込んでいけば半ば自動的に優れた大学教員になることができる、というかなり短絡的な考えを抱く人が多かったように思う。

このような伝統的な大学教育観、大学教員観は、今日根本的に問い直されている。かつての大学は、同世代のごく少数の強い勉学意欲を持った学生が高度の学問を修めるために進学するところであった。しかし、いわゆる大学のユニバーサル化、すなわち同世代の過半数が大学に進学するようになって、現在の大学はついてくる意欲と能力を持った学生だけを相手にするような考えで教育を行うことはできなくなった。その結果、大学においてもようやく教育方法の在り方についての議論、考察、探究が行われるようになった。大学教員も優れた研究を行うだけでなく、優れた教育の在り方を求めていくことを要求されるようになったのである。

教育方法の探究に関しては、大学教員はおそらく初等・中等教育の教育者に比較してはるかに遅れているのではないかと思われる。ただ、自分自身を含めた大学教員の弁明になるが、この「遅れ」にはいくつか理由がある。一つには、大学のユニバーサル化によって学生の意識や質が変化してきたことに対して教育改革の必要性が提起されてきたのはここ20数年のことであり、この変化に対応することが容易ではなかったこと、もう一つは、より本質的な問題として、大学教員が日本の学校教育の伝統的な教育観を共有していないこと、にあると思われる。

ここで日本の学校教育の伝統的な教育観というのは、先生と生徒の関係を教える者と教えられる者との一方的固定的な関係としてとらえ、教育を文字通り生徒を「教え育てること」とみなすような考えのことである。現在の日本の学校教育が依然としてこのような考えのもとに行われているかどうかは知らないが、少なくともかつての日本の学校教育の弊害として生徒の自立を促さないことが指摘されていた。

教育の目的は人間を成長させていくことにある。自立した人間を生み出すことが目的である。自ら考え、正しく考え、そして自分で自分の態度を決めることができる人間を形成することが問題である。最初から正しい答えを示してそれを強制的に習わせるようでは、自ら考える自立した人間を形成することはできない。逆に日本の大学教育は、大学生は自ら考えるべきだという建て前のもとに学生を放任し、結果的に責任ある教育になっていなかった面がある。中等教育にも大学教育にも問題があると思われる。

教育は指導される必要のない人間にするために指導するという矛盾を内包した営みである。最適の決まった方法があるわけではない。教職への道を進もうとする皆さんは、この困難な課題にぜひ勇気をもって挑戦していただきたい。